外国人の歴史情報と観光振興への活用

東京大学　正会員　清水　哲夫
東京大学　フェロー会員　森地　茂
東京大学　須賀　可人

１．はじめに

主要な産業がない地域にとって，地域活性化の方策として観光産業への期待が高まっている．特に，我が国の国際観光の現状は，日本人の海外渡航者数が１６００万人/年であるのに対して，外国人の国内訪問者数は４００万人/年程度にとどまっている[1)]．さらに，そのような外国人観光客のうち，大都市部以外の地域を訪れる割合は決して大きくない[2)]．その原因としては，交通アクセスの問題や，核となる集客施設の欠如などの本質的な問題の他に，本来は魅力があると考えられる観光資源に関する地域の意識が低く，その情報発信が進んでいないことも一因ではないかと考える．それでも，日本を訪問する外国人の主な目的は多くは大都市部にあることは否定できないが，もしも，ついでに地域に存在する観光資源を訪問し，その魅力が外国に伝われば，やがては主要な訪問先になりうる可能性を秘めている．このような正のループの可能性を検討することが本研究の動機となっている．

さて，地域にとって，大規模な開発整備が必要ない新たな観光資源は複数考えられる．本研究では，その中で歴史上の外国人の足跡に関する情報や関連施設に着目し，その外国人観光客誘致への活用について基礎的に検討することが目的である．その手段として，自治体などへの情報提供を依頼した．具体的には，全国市町村と在日大使館への調査票配布・回収を中心とし，これに書籍やウェブサイトの情報を添付して，「外国人の歴史情報」に関するデータベースを作成した．さらに，具体の検討事例として，道央に焦点を絞って追加的な調査を行った．

２．情報収集

始めに，上記の方法で歴史上の外国人の足跡に関する情報を収集した．その結果として全体で１５５人，延べ２３４件の情報（同一人物の異なる市区町村からの情報を各々数えている）が得られた．これらの情報の中では，欧米からのお雇い外国人に関するものが多く，全国各地から多様な情報が得られた．図１はこれらの情報をデータベースとしたもの一部である．また，この２３４件の情報を人物の出身国，我が国で足跡を残した地域別にクロス集計したものが表１である．この表より，いくつかの国籍・地域に関して情報が集中している例が見られる．このうち，例えば東北のイギリス人の情報にはイサベラ・バード（明治時代の旅行家）に関するものが９件含まれている．中部のイギリス人の情報にはウォルター・ウェストンに関するものが１０件含まれている．また，各地のオランダ

都道府県	市町村	名前	国	地方・都市	時代・年代	職業	活動	みどころ
北海道	枝幸町	ダビッド・トッド博士	アメリカ	マサチューセッツ州	1896年	天文学者	日食の観測	日食観測記念碑
北海道	小樽市	ジョセフ・ユリ・クロフォード	アメリカ	ペンシルバニア州	1878年～1880年	土木技師	小樽～札幌間に鉄道を開通させた	小樽交通記念館
北海道	北広島市	ウィリアム・スミス・クラーク博士	アメリカ	マサチューセッツ州	1876年～1877年	農学者、教育者	北海道開拓期における欧米式農業の導入など	クラーク博士記念碑
北海道	札幌市	ウィリアム・スミス・クラーク	アメリカ	マサチューセッツ州 アッシュフィールド	1876年～1877年	農学者	札幌農民学校初代教授	クラーク像、丘の上のクラーク像
北海道	札幌市	イサム・ノグチ	アメリカ	ロスアンゼルス	1988年	彫刻家	モエレ沼公園の設計、ブラック・スライド・マントラ製作	モエレ沼公園、ブラック・スライド・マントラ
北海道	札幌市	ホーレス・ケプロン	アメリカ	マサチューセッツ州	1871年～1875年	北海道開拓顧問	開拓期の指導	ホーレス・ケプロンの像
北海道	札幌市	エドウィン・ダン	アメリカ	オハイオ州 スプリングフィールド	1876年～1882年	営農指導	農場を営み、営農を指導	エドウィン・ダン像、エドウィン・ダン記念館
青森県	弘前市	ジョン・イング	アメリカ	イリノイ州	1847年～1878年	宣教師	りんごを紹介	日本キリスト教団弘前協会、旧東奥義塾外人教師館
秋田県	大館市	イサベラ・バード	イギリス	ヨークシャー	1800年代後半	旅行家	日本を旅行した	—

図１ データベースの一部

キーワード　外国人観光客，地域活性化，歴史情報
連絡先　〒113-8656　東京都文京区本郷 7-3-1　東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻　TEL 03-5841-6129

人の情報にはヨハネス・デ・レーケに関するものが１４件含まれている．さらに，お雇外国人をはじめとして多くの外国人が東京を訪れている例が見られる（主たる活動とは別な場合も多い）．これらを考慮に入れると，北海道におけるアメリカ人に関する情報（１４件，特に道央地域に１０件が集中している）は多いと考えることができる．

なお，道央における情報を具体的に挙げると，ウィリアム・スミス・クラーク（北海道大学教授），ホルト（豊平橋設計等），ホイーラー（札幌時計台の構想等），ホーレス・ケプロン（北海道開拓顧問），エドウィン・ダン（営農指導），ジョセフ・ユリ・クロフォード（札幌～小樽間に鉄道敷設），エドワード・モース（手宮洞窟を調査），イサム・ノグチ（彫刻家）などである．

表１　外国人の歴史情報件数の出身国・活動地域クロス集計

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
アメリカ	14	7	14	5	6	1	2	3	52
イギリス	5	11	17	18	1	3	1	7	63
ドイツ		2	10	3	3	2	1	3	24
オランダ	1	5	4	9	3	1		3	26
フランス		3	3	1		1	1	3	12
スペイン		2			1	1		2	6
韓国			2		3	1		5	11
中国		2		1	5			3	11
台湾								1	1
その他	1	1	4	14	1	3	1	4	29
合計	21	33	54	51	23	13	6	34	234

３．道央への追加調査

今回の調査からこのような情報が得られた一方で，詳細は講演時に紹介するが，歴史情報とともに尋ねた市区町村の外国人観光客誘致への取り組みは大変少ないことも明らかとなった．しかし，道央の市町村は外国人観光客誘致に比較的熱心に取り組んでいることも同時に明らかとなった．そこで道央地域において，外国人観光客誘致への取り組みの内容，施設・環境整備への意向，誘致のターゲットとする国籍などを再度詳細に尋ね，さらに，今回のアメリカ人の歴史情報に関するデータを提示した上で，その活用の可能性を同時に尋ねた．その結果，外国人の歴史情報を多く持っている札幌市・小樽市においては，この情報を観光振興に活用するという考え方のないことが明らかになった．これは，北海道の多くの市町村もそうであるが，両市においても外国人観光客誘致の興味は台湾・香港・韓国・中国などのアジア各国に絞られており，アメリカは興味の対象外であるためであると考えられる．

各市町村の抱える観光資源においては，「雄大な自然」が観光客に対する最大のアピールポイントとされていることも明らかとなったが，このことがアジア重視の方針と重なり，アメリカからの観光客数が伸びていないことの原因となっていると考えられる．これは，一般的にアメリカ人観光客にとっては，「雄大な自然」というのは自国にも同様の魅力があり特別なものではないからである．反対に，アメリカ人観光客は一般的に自国の先人の歴史情報などには興味を示しやすいとされており，このような歴史情報の提供は観光誘致に大きな可能性を秘めていると考えている．

４．今後の展望

本研究では，日本で活躍した歴史上の外国人に関する先駆的な情報収集を行ったが，近隣諸国の中国や韓国の情報がほとんど得られなかった．道央でもそうであったように，我が国の外国人観光客誘致のターゲットはアジア諸国であると考えられ，再度アジアの歴史情報にターゲットを絞って調査する予定である．なお，現時点では調査データをデータベースとして構成した段階であり，詳細な考察が行えていない．講演時に，より詳細な分析結果を示す予定である．

参考文献

１）国際観光振興会 （2000） 日本の国際観光統計-1999 年(平成 11 年)-
２）国際観光振興会 （2000） 訪日外国人旅行者調査 -訪問地等について- 1999-2000